

栄光

教 説

『驚くべきものに造り上げられます』

詩編139編1節〜24節

ガラテヤの信徒への手紙4章9節

柿ノ木坂教会牧師 渡邊義彦

説教・「驚くべきものに造り上げられます」 渡邊義彦牧師…1
特集・断捨離していますか…2
説教・「転ぶ私たち」 岸俊彦牧師…5
CS夏期キャンプ 報告…6
渡邊義彦牧師との 懇親会報告…7
長老のファイル…7
牧師の書齋から…8

わたしたちの中には、結婚している者も、そうでない者もいます。幸いな結婚を続けている者、結婚は不幸で苦しいと思っている者もいるかもしれません。これから結婚する者、年を重ねるまで結婚してこなかった者もいます。結婚を解消し離婚した者もいるかもしれませんが。夫、妻が既に先に召され世での結婚を解かれた者もあります。結婚について様々なかたちがあります。

けれども、わたしたちが、今日、命をいただいてここに生きているということは、どのような結婚のかたちであっても、父となつてくれた人、母となつてくれた人がいてわたしがいるのです。わたしが存在するに必ず父、母がいます。

彼らが良い父、母であつても、悪い父、母であつても、父母がいてくれて生まれたという事実がわたしの身の上の起こるのに、神の御心、御意志、御計画があつたことを、わたしたちは聖書と信仰に基づいて信じています。

聖書は、父母を敬え、自分の結婚も、隣人の結婚もいたずらに結婚の秩序を乱してはならない、姦淫してはならない、と結婚を大切にすることを教えます。しかし、結婚の大切さを教える一方で、人間の結婚が完全ではなく永続するものではない、人間の結婚の限界も当然知っています。人間の結婚の限界を踏まえて、聖書は結婚の秩序、離婚する者たちへの配慮をも伝えます（1コリント7章）。

この限界を持つ人間の結婚に、新約聖書においては、夫としていてくださるキリストと妻とされている教会のあり方、旧約聖書においては、夫でいてくださる主なる神と妻であるイスラエルのあり方を見えています。壊れてしまうほどに脆く、欠けある人間の結婚に、永遠でいてくださる神と、神の民の永続するあり方を見えています。主なる神とわたしたちのあり方は、ときとして夫婦の関係としてたとえられ、またときとして、父子の関係にたとえて、夫婦であるうと、親子であるうと人間同士の繋がりにおいて実に危ういものと思わざるを得ない関係に、神が、わたしたちを愛していてくださる完全なことが、欠けある仕方ながら表わされているのです。

詩編は、母親のお腹の中で赤ん坊の命が育まれてゆく様をまるでレントゲンでも見ているかのようになり、神が御覧になって命の育みを司ってくださることを謳います。この母をして、わたしたちを育み守ってくださり出産へと至らせてくださったのは、神の御心、神の御意志、神の御計画であることとを信じるころからだけ謳うことのできる詩です。

また、使徒パウロは、人が母の胎に命を与えられて生まれてくることを教会に当てはめ、さらに大きなこととして考えました。女性だけが経験する産みの苦しみを男性は到底経験も理解もできません。けれども母親が経験するのと同じ苦しみを教会が再び生まれるため苦しんでいる、とパウロは語るので。使徒は、福音から離れてしまっている教会に呼びかけます。兄弟姉妹たちが、もう一度、福音に聞くことができるように、もう一度、聞いた福音を宣べ伝えることができるように祈り、呼びかけるのです。

教会の改革者たちは、教会は絶えず改革されると言いました、終わりの日まで、生涯に亘つてわたしたちは罪人として悔い改めることを言いました。わたしたちは新しく教会と出会い、キリストの大きさを知ってゆきます。これまでもそうであつたように、これからも、主なる神が、この経堂の地で教会の伝道と、教会の建設に御力を注いでくださいます。

断捨離 して いますか



断捨離とは必要のないものを捨てて物に捉われない生活を手に入れること。
効果があると分かっているにもかかわらず実行できないものです。
あなたが整理したいもの、整理してよかったものは何ですか？

地上で必要なもの

大友麻子

マニラで働いていた時も含めると、数えきれないほど引っ越しをしました。娘を産んでからも大家さん都合などもあり4回引っ越しをしています。そのたびに、ささやかながら増えてきた家財道具を眺めて、できるだけ物を持たずに身軽でいようと思っていたはずなのにと首を傾げつつ荷造りをしました。「地上に宝を積んではならない」という御言葉を思い出します。井戸を掘っていた頃、「土の人と風の人」という話題になり、土地に根を張って有機農業や林業を始めた仲間たちは「土の人」で、いつまでもあちこちでフラフラと井戸を掘っている私は「風の人」だね、と話したことがありました。風の人が種を運び、土の人が豊かにした土壌でその種が芽吹くから、ちょうどいいんだねと楽しく盛り上がったのを思い出します。そんな私は、引っ越しのたび

に、あれもこれもいらない！と一気に処分したくなるのですが、対する娘は慎重派です。思い出を大切にします。「保育園で拾った葉っぱを入れるために作った箱」「学童保育で作ったけん玉」「誰々ちゃんがくれたあれこれ」と、ヨレヨレになった紙の箱や、紙コップと銀紙のボールで作ったオモチャなどを大切にしまい込んでいます。私が持ち合わせていない柔らかなでみずみずしい感性が、娘の中で育まれているのを感じます。一方で、ゲージツ家・KUMAさんこと篠原勝之さんが小説作品で書いた「もちおもり」という言葉も、私は折々に思い出します。さまざまな「モノ」も「コト」も、その背後にある物語とともに、いつしかずっしりと「もちおもり」してくるのです。本当に大切なものは多くはないはずだよな、と思うにつけ、ずっしりとした何かを「断捨離」していきたくないのでしよう。そして今日も、「いらぬものは整理しなさいよ！」「わかってるよ！」という高校生になった娘とのバトルが繰り返されます。

進まない片付け

濃 眞智子

「人が生きていくのに必要なものはどれくらいなのだろうか…」と考える今日この頃です。義母の住んでいた柏市の家の片付けをしている最中にこの原稿の依頼を受け、ドキッとしました。

物量の多さに身も心も押し潰される…と感じるほど。暑さも相まって、息苦しく憂鬱になってしまいます。業者に任せるにしても、ある程度の整理はしなければなりません。なぜこんなに沢山？と思いますが、今は不要なあれもこれもある必要で、それぞれに意味があつたのです。60余年を幸せに暮らした証でもあります。

3人の親が施設で暮らしています。父と義母は昨夏、一番暑い時期、同じ週にそれぞれの場所へと移動しました。準備するものがほぼ同じだったので、2つずつ購入し衣類を含め、全てに名前を書きました。荷物をまとめてみると施設

の車に半分ほど、それほど多くはありませんでした。異常な暑さの中で度々ダウンしてしまう親たちを守るのは限界でしたので、良い場所を与えられたことを感謝しました。そして、晩年を生きるというのは誰かに身を委ねることだと思いました。

昨晚、介護で長野に帰省している友人からメールがきました。「生きるこことって食べて寝て排泄して洗ってなのだなあ」。本当にそうです。いつか自分にもそのような時がやってきます。その時に自分たちが親にしていることを誰がしてくれるのだろうかと思いません。誰かがわからないのなら、やはり準備は必要、断捨離はそのはじめの一步なのかもしれません。これから実家、そして我が家の片付けもあります。モノだけでなくデータ断捨離も。いくら時間があっても足りないと思うほどのボリュームです。

必要は既に与えられていることに感謝し、もつと頭を使わなければ。この身ひとつで天に帰ることを忘れずに、歩みたいと思います。

気持ちも一緒に整理する

沢田寛子

3月に亡くなった母の物を、最近になってようやく整理し始めています。祈祷会の後、弟が仕事から戻ってから、時間を決めて少しずつ。「今日は本関係にしよう」と弟が言えば、私が見て仕分けし、不要な本を弟が束ねる、といった作業段取りです。洋服やカバンに關しても同様の作業をしています。

整理に時間がかかったのは、母が使っていた机の引き出しの中に入っていた物です。クリスマスカードや誕生日カード、日記や手帳といった「手書き文字」のものは、どうしても手が止まってしまい、中を見たり読んでしまいます。弟が入院中に病院から母に送った手紙は、一つのフォルダにまとめてありました。弟に「ママ、大事に取ってあるけれど、これはどうする？」と聞くと、一瞬彼の手も止まりましたが、結局「捨てて大丈夫」という返事でした。「大丈夫

という言葉に私は弟の母に対する思いを感じ、胸がいっぱいになりました。そう、大丈夫だよな。

1966年の丸紅の手帳がありました。日記として使っていたようですが、パラパラとめくってみると、「健6歳」と書かれた弟が鉛筆で描いた絵がありました。初めて見る絵に二人とも思わず笑ってしまい、「これは取っておこう」ということで一致しました。

整理しながら、母の存在をとて身近に感じる事が出来ています。母のいつもの顔、家族で過ごした色々な思い出が蘇り、寂しいけれど、気持ちが温かくなります。

母の本とバッグは、先日行われた礼拝後のミニバザーに出すことが出来ました。私は伝道委員会があつたので、夫に売り子をお願いしたところ、終わつた後、「何人かの方がママの話をしながらかつてくれたよ」と嬉しそうに話してくれました。整理した結果、「捨てる」のではなく、こうしてまた使つてくださる方がいて本当に嬉しいです。物は「モノ」であつても、そこには使っていた人の「キモチ」もあると思うからです。

日記の断捨離

島山直子

夫の死後8年近く経つのに遺品片付けは終わっていない。いくつかまだ使用価値がありそうなものは人に差し上げたり、フリーマーケットアプリを利用して売ってもらっている。その売上金で孫たちを回転寿司に連れて行き、「今日はおじいちゃんのごちそうよ!」と自慢する。とはいえ何もかもなくなるのは寂しいと思い、いくつものものは残しておきたくてあまり進まない。しかし私自身がなくなったら、残された家族に片付ける手間をかけるのは心苦しい。

とりわけ悩ましいのは日記である。夫は年に2冊は書いていたし、私は1年1冊なので二人分でゆうに百冊を超える。

夫の日記はときどき読んで、ひとりで涙したり、笑ったりする。「こんなこと考えていたのか」や、「この時は苦しかったね」、あるいは「楽しかったね」とひとり呟く

こともある。夫は私に読まれるとは考えていなかっただろうけれど、「そのうち処理しなければいけない」と言いつつ、亡くなる十日前までつけ続け、処理できずに召されてしまった。私たちの日記を家族といえども他の人には読まれたくない。尤も読みたい人もないだろうから、おそらくすぐに廃棄されると思うのだが。

断捨離は少しずつ進めているが、それらは全て食器、衣類、装飾品、書籍などモノ。日記はそうはいかない。私たち夫婦の日記など、文学的にも社会的にも価値は皆無なので、私が自分で処理できざるざるのタイミングを見つけて急が召されたらどうしたらよいか、先日突然悩み始めた。日記をつけられる年齢や肉体的制限と、これまでの日記を焼却する時期を見極めなければならぬのか。考えるたび、いつ召されるのかはすべて、主の思召しというところが問題だと思い、つい判断を一日延ばしにし、毎晩日記をつけている。諸先輩方はどうなさっているのでしょうか?

伯母のお家のお片付け

牧内美和

子どもの頃から、毎年母の実家がある広島へ遊びに行くのが楽しみでした。子どもの樂園はすべて祖母や伯母が用意してくれていたもので溢れていました。幸せな子ども時代でした。牧師の祖父と幼稚園園長の祖母、経理運営を担っていた伯母。子どもの喜ぶことに熟知している人たちでした。のちに移り住んだお家には伯母の夢が詰め込まれていました。

その後、コロナ禍には私一人が2階に移り住むことになりました。短い期間でしたが、伯母との距離が縮まった、神様からのプレゼントのような時間でした。時に喧嘩もしたけれど、伯母との暮らしは気ままに楽しいものでした。お花を生け、お茶を点て、好きで集めたものに囲まれて暮らしている伯母は、一人だけれど、ちつとも寂しそうではありませんでした。「このティーカップ可愛いよ

ね。おばちゃんに何かあったらちようだい」「いいわよ」。こんな軽口も平気で交わせる二人でした。今年の3月3日に伯母は93歳で亡くなりました。お正月には「また来るね、元気でね」といつものように手を振って閉めた扉。次に会ったときは病院のテレビ電話の面会でした。その時も「また来るよ、次は退院してお家でね」と別れました。それが最後でした。

5月に納骨式をして母と妹と3人でお家の片付けをしました。次々と出てくる母手作りのワンピース、大量の食器、着物や本。あれもこれも伯母の宝物はみな持って帰ればよかったです。あのお家に住み続けることで守ることは出来なかったかしら。子どもの頃遊んだ木のおもちゃが出てきました。引越しても捨てなかったのは、伯母がああ夏らしい出を大切にしていたからかな。そして約束のティーカップは今私の手元にあります。可愛いものが好きで沢山のものに囲まれていた伯母。伯母との思い出は物以上に今もあれやこれや溢れて、しばらく片付けることはできません。

説教

『転ぶ私たち』

詩編32編1節〜11節

ヤコブの手紙3章1節〜4節

岸 俊彦

「多くは教師になるな」(ヤコブ3・1)との命令は、2章からの続きです。ここでは「行いのない信仰もまた死んだものです」(2・26)と語られていました。ヤコブが関係した各地の教会で、キリストの福音をどう理解するか混乱

がありました。口先ばかりの信仰が教会を混乱させました。行いの伴わない信仰を説く教師(牧師)が、教会の混乱の元凶でした。御言葉に聞き従わない、宜しくない教師の存在を踏まえて「多くは教師になるな」と、ヤコブは命じました(2テモテ4・3〜5参照)。

遜であるようにと語りました。弟子(教師)の特権意識をキリストが糾しました(マタイ23・11、12)。16世紀の宗教改革者たちは、信仰のみ、聖書のみを宗教改革原理を教会制度にまで徹底し、万人祭司(全信徒祭司性)を説きました。牧師であろうと信徒であろうと、主の栄光のためにそれぞれ主に召され、賜物を生かして働く祭司です。それぞれが御言葉を説き明かし、伝道します。働きの違いはありますが、信徒も牧師も対等です。教師が聖職として特別視されることは聖書的ではありません。そもそも教師だけの問題ではありません。「私たちは皆、度々過ちを犯す」(ヤコブ3・2)からです。「私たち教師は皆」と読むべきではありません。礼拝する私たち皆が過ち罪を犯します。礼拝する私たち一人ひとりが、キリストの福音に聞き従おうとしている

でしようか。

「私が沈黙していたときは／一日中呻き、骨も朽ち果てました。昼も夜も御手は私の上に重く／夏の暑さに気力も衰え果てました」(詩32・3〜4)。まことに、私たちは言葉(ロゴス)で度々罪を犯すために、骨も朽ち果てるほどの有様です。このような罪人である私たちにできることは、主に罪を告げ、過ちを隠さないことです。「私の背きを主に告白することです」(詩32・5)。

ヤコブは、3・3「馬を御するには、口にくつわをはめれば、その体全体を操ることができます」(3・3、詩32・9)と語りました。馬を御する轡くわとは何でしょう。その続きには、激しい風に吹かれる大きな船を、まっすぐに進めるため、舵取りが操る小さな舵についてヤコブは語ります。大きな船を操る小さな舵とは何でしょう。ヤコブは「御父は、御心のままに、真理の言葉(ロゴス)によって私たちを生んでくださいました。それは、私たちを、いわば造られたものの初穂とするためです」(1・18)と語っていました。

罪と死から救ってくださいる真理の言葉、まことのロゴス、主イエス・キリストこそ(ヨハネ1・1)、日々転ぶ私たちを支え、導く、轡くわであり、舵かじとなってくださいます。このロゴスに聞き、罪を告白し、罪の赦しを私たちは確信することができます。聖餐を祝い、キリストの命をいただいて、罪の赦しの恵みを新たにされるのです。真のロゴス、キリストが、私たちを支え、導き、主の御旨を悟らせ、御国に至る、この道を示してください。キリストこそ、私たちの隠れ場。苦しみから私たちを守り、救いの盾で囲んでくださいます。たびたび躓き、転び、過つ私たちを、なんとかまっすぐにキリストの道を行くことができよう。主がまことのロゴスに聞くようにしてください。聞くだけではありません。まことのロゴスを食べさせてくださいます(イザヤ50・4)。

御言葉に聞き、祈り、聖霊に執り成していただき、主を信じ、罪の赦しを確信し、罪を告白し、主に祝福されて生きる私たちこそ、まことに幸いな者です。

教会学校夏期キャンプ報告

ドベルで奏でたりしました。夜は、皆で和気藹々と回転しりとりや十字架音頭に興じました。

今年度は異例ずくめのCSキャンプでした。岸牧師と石室校長が不参加の上、当初予約していた施設が諸事情で利用できなくなりました。そのため急遽、最繁忙期でも利用できる先を探し、期間を1泊2日に短縮して、辛うじて予約できた「高尾の森わくわくビレッジ」を初利用して開催にこぎつけました。心配もありましたが、子どもたちは元都立高校をリノベーションした宿を気に入り、用意したプログラムも楽しめたようで、教師陣はほっと胸を撫でおろしました。

キャンプのテーマは、CS年間テーマと同じく「この人を見よ」とし、キリストの生涯について学びました。教会で岸先生の説教による主日礼拝を守り、出発しました。宿到着後は、施設探検と謎解きを兼ねたオリエンテーリングにより、イエス様の生涯を題材にした西洋絵画を時系列順に並び替えたり、「この人を見よ」の歌詞が登場する『まぶねの中に』をハン

翌朝は絵日記の代わりにみんな

でひと言感想を書きました(本稿後半に記載。教会1階に実物を掲示)。加えて、みんな協力して、イエス様と弟子の象徴としての魚と、「この人を見よ」のラテン語である「ECCE HOMO(エッケ・ホモ)」をあしらったちぎり絵を制作しました。集合写真にも写っています。教会の礼拝堂手前の階段に掲示してあるので、是非ご覧になってください!

閉会礼拝では、諸橋長老の説教で「見よ、この人だ」と語り、主イエスの無罪を確信しながらも聴衆の圧力に屈したピラトの罪を知り、帰途につきました。

2日間ということもあり、大人も子どもも体力が切れず、爽やかなキャンプとなりました。子どもたちがキリストを近くに感じ、人知をはるかに超えた、私たちに對する愛に気づいてくれたらと、願ひ祈るばかりです。(原 良介)

小学4年 重藤利愛

私が、楽しかったことは、ご飯と、自由時間と、回転しりとりとおふろです!

小学4年 島山詩央

私は、1日目のなぞときや、十じかおんど、みんなでごはんを食べたことなどがとても楽しくて、思いでになりました。

中学1年 重藤佑里花

今回キャンプに来て、楽しい思い出が出来ました。プログラムも全部おもしろかったし、イエス・キリストについて楽しく学べる事が出来ました。

高校1年 角田由希

2日間という短い間だったけれど、なぞときやしりとり大会、制作プログラムなど、多くのアクティビティができて楽しかったです! あとご飯がおいしかったです!

教師 牧内 歩

初!! 1泊2日のCS CAMP、とても充実した内容でした。「この人を見よ」というテーマがピッタリの2日間でした。

教師 諸橋鷹広

汗をかきながら、たくさん遊んで、イエスさまのことを学んで、実りある2日間でした! 初めて訪れた施設ですが、大人も子供も大満足!!

教師 原 知子

今年は初めて高尾の森わくわくビレッジにきました! 広くてキレイですてき! みんなと主イエスの人生の絵の並べかえをしたり、しりとりしたり、いっぱい楽しくすごしました!

教師 石室優子

みんなで奏でたハンドベルに感動☆十字架音頭とっても盛り上がったね! みんな仲良しだった!! 最高?



渡邊義彦牧師との懇親会報告

「驚くべきものに造り上げられ

ます」と題した礼拝説教ののち、渡邊義彦牧師との懇談会が礼拝堂で持たれました。まずは岸俊彦牧師との交わりを中心に、東京教区総会議長になるまでのご自身の経歴を紹介くださいました。

1961年三鷹市牟礼のお生まれで、幼少時代は地元小学校に通い、東久留米の教会のメンバーでした。おばあ様が岸牧師の出身の教会である相愛教会のメンバーで、

実際には会ってはいないものの昔から岸牧師とは何らかの繋がりがあったとのこと。東京神学大学卒業後は柿ノ木坂教会伝道師、副牧師を経て、2001年より麻布南部坂教会牧師就任（2010年）。その頃から東京教区西南支区で働き、支区長であった岸牧師から書記に指名されました。そして東京教区においても岸牧師と共に働き、岸牧師の東京教区総会議長退任ののち、後任の議長に就かれました。

次に、1971年から20年間、教団の内部分裂のために東京教区

総会が開けなかった、その弊害としての東京教区の課題を3つ説明してくださいました。

1. 教区負担金未納教会からの負担金の徴収、2. 東京における支区、教区がそれぞれ独自に活動をしており、支区、教区の役割分担の明確化が必要、3. 少子高齢化、クリスチャン人口の減少による各個教会の財政悪化と同時に起こった東京教区の財政悪化とその立て直し。

日本全国を見回しても、少子高齢化、人口減少、それに伴う様々な産業の衰退、経済の低迷、世界的地位の降格が起こる中、日本のキリスト教も様々な問題を抱えています。クリスチャン一人ひとりが目の前にあつてできることを、たとえそれがどんなに小さな働きに見えようと、確実に行動していくこと、それが我々に課せられている課題だと質疑応答の際に答えていただきました。

説教だけでは知ることのできない渡邊先生のお人柄に、この懇談会で触れることが出来、大変有意義な時間となりました。

(大西 順)

長老のファイル

12年ぶりに「愛唱讃美歌・愛誦聖句アンケート」を実施しました。提出は済みましたが、愛唱讃美歌・愛誦聖句にしていたのか？ 私自身は12年前どれを愛唱讃美歌・愛誦聖句にしていたのか記録しておらず、記憶が曖昧です。今回改めて讃美歌を選んでみて、年齢やその時の状況によつて選ぶ讃美歌は当時と一部変わったかなと思いました。また私の場合、讃美歌1954年版に慣れ親しんで歌う時代が長かったので、やはり1954年版に愛唱讃美歌が多くあります。

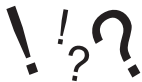
愛誦聖句も5つに絞るのはとても難しい作業でした。以前からずつと変わらず愛誦聖句としていたのがある一方、新たにインパクトを受けた聖句や説教で教えられた聖句が増えたのだと思います。現在の礼拝では聖書協会共同訳聖書を使用していますが、以前の訳で自分の中にすりこまれていた聖句も多く、それはそれで愛誦聖句です。教会員の方々が選んだ愛唱讃美歌・愛誦聖句がどれなのか、調

査結果を楽しみにしています。

岸牧師が経堂北教会に着任されてから42年の間に、共にここで過ごし、それぞれの道へ進まれた兄弟姉妹の中の一人である饒平名丈伝道師（カンバーランド長老キリスト教会泉伝道教会）が振起日礼拝で説教してくださいました。これは同じ時を過ごした私だけでなく、経堂北教会にとって大きな喜びです。片岡宝子牧師がおっしゃっていました、まさに「神様のネットワーク」であり「主とのつながりを喜ぶ」ことができ、感謝です。神様のご計画は本当に私たちにははかりしれません。南三鷹教会の小田哲郎伝道師も学生時代を青年会で共に過ごした仲間です。大学卒業後は海外を拠点に仕事で活躍されていましたが、召命を受け、牧師の道へ進まれるとは驚きでした。そして饒平名伝道師と小田伝道師は日本聖書神学校で同期だったそうで、更に驚かされました。「私が植え、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させてくださったのは神です」（1コリント3:6）。

(尾藤美紗子)

個人消息



牧師の書齋から

引越のために蔵書を整理しました。日本語の注解書は教会のピスガの部屋に既に整理済みです。古典的洋書の注解書は必要な方に差し上げました。残った本は40冊の段ボール箱50箱分でした。最近転居した方は70箱と聞きましたから、少なめです。

その半分を処分しました。リサイクルに出したり、キリスト教関係の古書店に引き取ってもらった

り、一般の古本は古書店に持ち込みました。古書店に持ち込んだ4箱は3800円で引き取られました。買ったときの1、2冊分の値段です。車で往復2時間かかりましたから、時給としては高めです。残念なのは、それらの書物が頭の中に入ることなく処分しなければならなかったことです。

ちなみに、息子が残していったブランド物の服を1袋リサイクルショップに持ち込みましたが、それらの方がはるかに高い値で引き取られました。

CDやDVDは今回処分しませんでした。本ほどかさばらないし、また観たり聞いたりすることがあると思っただけです。ただし、オーディオ機器は古くなりましたので新しく購入するつもりです。

今回の引越でもう一つ思い知らされたことがあります。購入にしろ手続きにしろ、スマホがないと手間がかかることです。仕方なく妻がスマホを持つことになりました。モニターを見ながらキーボードを打ち、ネットで世界と繋がる時代ではないのだと思われ知らされたことがあります。現金お断りの店に入り焦ったことがあります。スマホでなくカードでもいいことに気づくまで間があるくらいですから、完全に時代遅れです。聖書1本で生きられると信じていますが。(岸)

掲示板



○西南支区平和講演会

9月22日(日)午後2:30 於 美竹教会
「良き力に不思議にまもられて
一ボンヘッファーの平和思想に学ぶ」
東京大学教授 小嶋大造

○聖霊降臨節第20主日礼拝

9月29日(日)午前10:15
説教 狩野進之佑牧師(愛知守山教会)

○西南支区音楽礼拝

9月29日(日)午後2:00 於 霊南坂教会

編集後記



▽4月から『栄光』校正をお手伝いさせていただいています。背筋が伸びるような気持ちで一人おひとりの「ことば」に向き合わせていただいています。(大友^麻)

「栄光」2024年9月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp